

戦場のヴァルキュリア~ 女神の救済~

caribou

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

征暦1935年、10月。

豊富なラグナイト資源を求めガリア公国に侵攻を開始した東ヨーロッパ帝国連合だったが、ガリア軍の予想外の反撃に遭い戦線は徐々に後退。ガリア国内に残された最後の拠点、ギルランダイオ要塞にて、戦力の立て直しを図る。

しかし、ガリア軍の勢いを留めることは叶わず、ギルランダイオ要塞は陥落してしま

う。

その最中、ガリア軍に一人の帝国軍女将校が捕らわれた。

それを知った帝国軍分隊長のカール・オザ・ヴァルド曹長は、彼女の救出に動き出そ

うとするが――。

一兵卒に過ぎなかつた彼等が、その任務を全うするとき。帝国と、そしてガリアをも巻き込んだ、強大な陰謀が明らかとなる。

目次

登場組織・人物紹介	1
序章	9
第1章 救援	
第1話	21
第2話	32

登場組織・人物紹介

【登場組織紹介】

○東ヨーロッパ帝国連合

●東ヨーロッパ帝国連合・中部ガリア侵攻部隊司令部付き即応遊撃分隊 ブラウエ・ローゼン^①

中部ガリア侵攻部隊総司令官であるセルベリア・ブレス大佐直属の即応部隊。指揮官は《鉄人オザヴァルド》ことカール・オザ・ヴァルド曹長。

司令部付きと称されてはいるものの、その実態は自ら前線で戦うことを是とした、ブレス大佐の直援部隊であり、その親衛隊といった性質が強い。部隊創設を提唱したのは、指揮官でもあるカール・オザ・ヴァルドその人である。

部隊の愛称である「ブラウエ・ローゼン」は蒼い薔薇の意。この愛称は、一説には蒼い炎を纏い、ヴァルキュリアとして戦うブレス大佐の姿を見た帝国軍高級将校が、その苛烈なまでの美しさを『まるで蒼い薔薇のようだ』と評したことから、彼女の傍らで戦う彼等の通称として定着したものとされる。

また、ブレス大佐のファーストネームである『セルベリア』は、帝国において蒼い薔

薇を示す単語としても知られており、それにあやかった為とも言われる。

●東ヨーロッパ帝国連合・中央方面軍・情報総局

中央方面軍が独自に組織している特務機関。初代局長は、《ドライ・シュテルン》の人でもあるベルホルト・グレゴール少将（当時、大佐）。

対外諜報、情報工作はもちろん、国内にも非常に大きな諜報網を布いており、秘密警察的な役割も果たしている。

ルーファス・J・シユタンケ中佐が属する第3局は軍内部の監視を主な任務としており、彼が率いる9課はガリア侵攻部隊の動向を探っていたと見られているが、詳細な情報は軍事機密として秘匿されており定かではない。

これは非公式な情報であるが、シユタンケ中佐は参謀本部の命により、《ヴァルクキュリア》の軍事転用に関する情報を収集していたと見られ、《ヴァルクキュリア》を抱き、その兵器としての有用性を模索していたマクシミリアン準皇太子麾下のガリア侵攻部隊の監視任務を命じられたと思われる。

○ガリア公国

●ガリア正規軍・中部方面軍

ゲオルグ・ダモン将軍が総司令官を務め、ガリア戦役においてはガリアの主力として

戦った部隊。義勇軍の指揮権もここに属する。

ダモン將軍の指揮官としての能力不足から、余計な犠牲を払うこともしばしばだが、兵士の錬度と士気は高い。また、バルドレン・ガツセナル中佐を初め、優秀な前線指揮官を多数有しており、これも兵士たちの士気を旺盛に保った一つの要因であろう。

しかしながら、貴族出身のダモン將軍は、主に平民から構成される義勇軍の存在を目の敵にしており、彼等をもつ先に前線に送り込むなどの無策な暴挙へと走るなど、軍内部では反発も多かったようである。このような背景が、戦役終了後、ガリアが内乱の渦に飲まれることとなる遠因になったことは、想像に難くない。

●ガリア義勇軍・第3中隊・第7小隊

ガリア義勇軍・第3中隊に所属する小隊。指揮官は後に、《ガリアの英雄》と称されることとなる、ウエルキン・ギンター少尉。

ギンター少尉の類稀な指揮により、数々の困難な任務を成功させてきた義勇軍部隊の精鋭。その活躍は、ガリア軍内部はもちろん、帝国軍にも知れ渡っており、戦役終盤の帝国軍からは畏怖の対象として認知されていたようである。

第二次ギルランダイ才要塞攻略戦においても、抜きん出た活躍をしており、第一段階である正門の突破、第二段階の要塞制圧戦においても、その主力を担い、要塞防衛の司令官であったセルベリア・ブレス大佐を捕らえることに成功する。

【登場人物紹介】

○東ヨーロッパ帝国連合

●セルベリア・ブレス

マクシミリアン準皇太子直属の幕僚である《ドライ・シュテルン》の紅一点にして、中部ガリア侵攻部隊の総司令官。階級は大佐。

22歳という若さで大佐まで上り詰め、中部ガリア侵攻部隊の司令官に任じられるなど、軍人として非常に優れた才覚をもつ女傑。また、前線で自ら戦うことを是とする武人でもあり、その戦績は帝国軍内部でも群を抜いている。

長い銀髪と真紅の瞳を持つ《ヴァルクュリア》であり、その能力を見初められ、マクシミリアン準皇太子に召し抱えられた過去を持つ。《ヴァルクュリア》として、過酷な実験に身を置く日々だった彼女は、そこから救いだしてくれたマクシミリアン準皇太子に、己が主としての感情以上のものを抱いていたようである。

過去の実験のトラウマから、ラグナイトの光を嫌っており、ラグナイドや手榴弾を携行せず、直属の支援兵にその役を任せている。ギルランダイオ要塞攻略戦において、偶然その役を担ったカール・オザ・ヴァルド曹長（当時、二等兵）の進言を受けて、直援部隊である《ブラウエ・ローゼン》の創設を認可する。

戦役終盤のギルランダイオ要塞防衛戦においては、要塞防衛の司令官として善戦するも、ガリア軍の勢いに押され、要塞の陥落を許してしまい、自らもガリア軍に拘束されることとなった。

●カール・オザ・ヴァルド

《鉄人オザヴァルド》の二つ名を持つ「ブラウエ・ローゼン」の指揮官。階級は曹長であり、所属する兵科は偵察兵。

ガリア戦役の初戦であり、また、彼の初陣でもあったギルランダイオ要塞攻略戦にて、毒ガスに犯された味方を救い、戦鬪を帝国軍優位に進めるといふ大きな功績を残したことに、帝国鉄星勲章を授与される。一兵卒が初陣にてこれほどの功績を為すことは、ヨーロッパ全土を鑑みても異例であった。このことから、その活躍は本国でも若干の脚色と共に、新聞で報じられるなど、期せずして帝国軍人としての名を知らしめることとなる。

ギルランダイオ要塞攻略戦時、支援兵だった彼は、その後偵察兵へと兵科転換し、
「ブラウエ・ローゼン」創設をセルベリア・ブレス大佐へと進言。その指揮官へと任じられる。

ブレス大佐と共に多くの戦場を経験し、軍人としての成長を遂げた彼だが、ナジアル会戦、ギルランダイオ要塞防衛戦と、立て続けに敗北を経験。ブレス大佐を守ることをす

らできぬまま、潰走を余儀なくされる。

● オットー・カリアス

「ブラウエ・ローゼン」所属の突撃兵。ギルランダイオ要塞攻略戦時から、カールと共に戦ってきた戦友であり、実質、分隊の次席指揮官。

大雑把な性格で、細かい作戦を苦手とするが、突撃兵としての腕は確か。

● ヘルベルト・シユルツェ

「ブラウエ・ローゼン」所属の突撃兵。

セルベリア・ブレス大佐の熱烈な『ファン』であり、曰く「大佐の魅力は胸と見せかけて実は太ももにある」とのこと。

● エルヴィン・オイゲン

「ブラウエ・ローゼン」所属の対戦車兵。

対戦車兵の例に漏れず、大柄な体格の持ち主で、分隊随一の力持ち。士官を目指していたが、士官学校の試験に落ちた過去を持つ。

● エーリヒ・ハルトン

「ブラウエ・ローゼン」所属の狙撃兵。

冷静な性格であるが、それが転じて冷酷にも見えがち。実はセルベリア・ブレス大佐を狙撃するのが夢であり、それを本人に明かしたことがあるが、「それは楽しみだ」と一

蹴された過去を持つ変わり者。

●ニック・コーレンベルク

「ブラウエ・ローゼン」所属の支援兵。

ナジアル会戦後に配属された新兵であり、ギルランダイオ要塞防衛戦が彼の初陣であった。気が弱い性格だが、頭が良い。

●ルーファス・ジェファアソン・シユタンケ

中央方面軍・情報総局・第3局・9課、課長。階級は中佐。

ガリア侵攻部隊の監視を命じられている、諜報部の人間。その任務の過程で、カールにある提案を持ちかける。

諜報部所属ではあるが、中央方面軍きつての精鋭である親衛猟兵連隊を動かすことができるなど、軍内部でも高い地位を持つと思われる。

○ガリア公国

●ゲオルグ・ダモン

ガリア正規軍・中部方面軍の総司令官。階級は大将。

第一次大戦を経験した歴戦の指揮官であるが、私情に流された指揮を行うなど、指揮官としての能力は決して高くない。しかし、公国の宰相である、マウリッツ・ボルグと

の癒着など、独自のコネクションを有しており、それを利用して今の地位を維持している。ギルランダイオ要塞攻略を通じて、元帥への昇格、さらには軍務大臣への就任を夢見ている。

序章

征暦1935年、ヨーロッパ大陸は二つの大国によって、そのほぼ全域を統べられていた。一つは、皇帝を頂点とした専制君主国家、東ヨーロッパ帝国連合。もう一つは、王政を廃した共和国連合体、大西洋連邦機構である。

重要なエネルギー資源であるラグナイトをめぐる、その領土を拡大してきた両国は、長年の緊張状態を破り遂に開戦。これにより、ヨーロッパ大陸全土が戦火に包まれることとなった。第二次ヨーロッパ大戦の勃発である。

帝国と連邦の中間に位置する武装中立国家、ガリア公国も例外に漏れず、ラグナイトを豊富に産出するその国土を狙った帝国により、侵攻を受けることとなった。

圧倒的軍事力をもってガリア公国へと一機に侵攻を開始した帝国軍は、要衝を次々に攻略。戦況は優勢に推移した。

しかし、義勇兵をも動員したガリア軍の必死の反攻により、戦線は徐々に後退。この戦争の趨勢を決定づけるとまで言われた、ナジアル会戦にて帝国は歴史的な大敗北を喫する。これにより、再び国境付近まで追い詰められた帝国は、国境の要衝であり、ガリア侵攻部隊総司令部も兼ねるギルランダイ要塞に立てこもり、体勢の立て直しを図つ

た。

対するガリア軍は、ナジアル会戦での勝利の勢いをそのままに、ギルランダイオ要塞奪還作戦を開始。帝国軍はセルベリア・ブレス大佐を要塞防衛の指揮官として、善戦したが、ガリア義勇軍、第7小隊の活躍もあり、ギルランダイオの堅牢な正門は突破された。セルベリア・ブレス大佐は友軍を逃がすため、自ら殿として戦いガリア軍に捕らわれ、要塞を脱出した少数の帝国軍部隊は帝国領内への敗走を余儀なくされた。

その部隊の中に、とある分隊が含まれていたことは、帝国内でもあまり知られていない事実である。

征暦1935年10月7日

ガリア公国・東ヨーロッパ帝国連合国境　ギルランダイオ要塞近郊

「くそッ！　ガリア軍め……！」

カール・オザ・ヴァルド曹長は、荒い息と共に吐き捨てた。

道とは言えないような細い山道を、生い茂る草木をかき分けるようにしてカールは走る。訓練とこれまでの戦闘で鍛え上げられたカールにとっては、この程度の山道を走ること自体はなんといいことはない。しかし、重い背囊とボディアーマーを身に着け、ライフルを担いだ今の完全装備状態では体力に限界がくるのも時間の問題だった。

戦闘時にはそれなりの防御力を発揮するヘルメットとボディアーマーが、鬱陶しく感

じる。顔全体を覆う、ヘルメットというより鉄兜と言った方がふさわしいそれを被っているせいで、顔面の汗を拭うことすらままならない。おまけにカールが担いでいるZMKar B《フランシスカ》は、集弾性を重視した長銃身のライフルだ。そのため、森を走るには邪魔でしようがなかった。今ばかりは帝国軍人たるカールも、ガリア軍の軽装な装備を羨ましく思った。

「おい、カール！この辺りまでくれば大丈夫なんじゃないか!」

すぐ背後を走っていたオットーが喘ぐようにカールを呼ぶ。彼の兵種は突撃兵のため、装備がカールより重く長距離を走るには不向きなのだ。オットーの声に答え、カールは走る速度を緩めた。

「流石に奴らも山の中までは追ってこないだろ……」

カールと共に帝国軍に入隊し、この戦争に参加したオットーは隊のなかでもカールが最も信頼を置いている仲間だ。そんなオットーの背後から、数人の帝国軍兵士が小枝をかき分けて現れた。いずれもカールと同じ隊の仲間たちだ。

「そうだな……、とりあえずこの辺りで小休止しよう」

木々の間に僅かに開けた場所を見つけると、カールは小休止を宣言した。同時に人数の確認をする。

オットーと同じく突撃兵のヘルベルト。対戦車兵のエルヴィン。狙撃兵のエーリヒ。

それに支援兵のニツク。

(五人……?)

要塞を脱出したときと人数が合わない。カールは自分の足元がふらつく感覚を味わった。

「ヴァルターとエルンストはどうした?」

動揺を隠しつつ、カールは仲間たちに問いかける。

「エルンストは要塞を出た直後にガリア軍の狙撃で死にました。ヴァルターは要塞内で、すでに一発貫つてて……」

皆が俯くなか、唯一答えたのはニツクだった。

「ヴァルターが撃たれていただと!?　なんで報告しなかったんだ!!」

反射的にカールの語気が荒くなる。

「す、すみません……。その——、ヴァルターが曹長には言うなと……」

ニツクは怯えるように縮こまってしまふ。その様子にカールは、はっと我に帰る。

「すまん、ニツク。部下の状況確認は僕の責任だった……」

カールは直情的にニツクを責めてしまったことを後悔した。

「それで、ヴァルターはどうしたんだ?」

務めて優しい口調を心がける。

「森に入った辺りで、足手まといになるからと……匣に……」

最後の方は絞りだすようにして、ニツクは語った。

「そうか……。辛い思いをさせてしまったな」

カールはニツクの肩を優しく叩いてやった。

ニツクは数週間前にこの隊に配属された新入りだった。そのため、仲間の死には、ひと際敏感であることをもつと気にしてやるべきだった。しかし、他の四人の仲間は脱落した隊員の話を聞いても表情を変える気配がない。カールもどこか、客観的な視線でそれを聞いていた。

別に悲しくないわけではない。仲間を死なせてしまったことに対する、責任もやるせなさも感じている。しかし、それを表に出すことができるほど、今の自分たちには精神的余裕がない。

「で——これからどうするんだ？」

伝説で語られるヴァルキュリアの槍を思わせるランス状の武器——対戦車槍を地面に置きながらエルヴィンが口を開いた。歩兵用の火器の中でも、群を抜いて重量のある対戦車槍を扱う対戦車兵には、筋骨隆々の者が多い。エルヴィンもその例に漏れず身長は190近く、上腕はカールの二回り近くある。無論、カールも兵士として平均以上には鍛えているのに、だ。

「守るべき大佐が捕まった今、俺たちは何に従って動けばいいんだ？」

エルヴィンが語った『守るべき大佐』という言葉。そこに、この部隊の全てが含まれていた。

中部ガリア侵攻部隊司令部付き即応遊撃分隊「ブラウエ・ローゼン」。それが、今カールが所属し、指揮している部隊の名だった。

中部ガリア侵攻部隊司令官たるセルベリア・ブレス大佐は、自ら前線へと赴くことを是とする、武人であり、その直援部隊として組織されたのが「ブラウエ・ローゼン」であった。一分隊に過ぎない彼等にこのような大層な愛称が付いたのも、セルベリア・ブレス大佐直属であるが故である。

「大佐は中部侵攻部隊の指揮官だぞ。そんな重要人物相手に、さすがにガリア軍も条約に反した扱いはできんだろ」

そう冷めた調子で言ったのはエーリヒだった。カールの『フランシスカ』を超える長銃身のZM SG Bは、肩に掛けたままだ。

エーリヒが言った「条約に反する扱い」がどのようなものか。隊内の者たちは想像はついているらしい。

戦時下においての捕虜の扱いは国や部隊によって様々ではあるが、必ずしも安全が保障されているわけではない。軍においてのモラルが低い場合や、物資や状況に追い詰め

られた場合、捕虜の虐待や虐殺は当然のように起こりうる。その対象が女性の場合、その運命はおのずと計り知れた。

しかし、セルベリア・ブレス大佐は上級士官であると同時に、中部侵攻部隊の司令官という重要な地位にある。そんな重要人物に不当な扱いをしたとなれば、その後の停戦合意に影響を及ぼす可能性も存在するとエーリヒは言っているのだ。

「けど、だからこそって可能性もあるんじゃないか？ 大佐ほどの地位にいれば、知っている情報は俺たちなんかとは雲泥の差がある。ガリア軍がその情報を求めて大佐を尋問にかけたとすれば……」

エーリヒにそう反論したのはヘルベルトだった。

「それに大佐はあの絶世の容姿だ……。極悪なガリア軍が放っておくとは思えない……！！」

ヘルベルトの語気には確かな怒りが込められている。このヘルベルトという突撃兵は帝国軍内に多くいる『大佐ファン』の一人であり、その中であって信者と呼ばれるほどの熱狂的な『大佐ファン』だった。そんな彼にとって、セルベリアが敵の手に落ちていくという状況は許しがたいものなのだろう。

「たしかに毒ガスを平気で使うような連中だ。尋問と称した拷問——いや、凌辱なんて気にも留めないだろうな」

オットーがどこか諦観した様子でヘルベルトの意見に同意する。

ガリア侵攻の初戦となったギルランダイオ要塞攻略戦の最中、ガリア軍は条約で禁止されている、硫化ラグナイトガスの空中散布を行った。そして、この隊にいるニツクを除く全員がそれを目の当たりしている。その出来事は、ガリア軍が条約を無視する無慈悲な軍隊と彼らに認識させるには、十分すぎる影響力をもっていた。

「んで、分隊長さんよ。どうする？ このまま、帝国領まで引き上げるか？ それとも――

エルヴィンはあえて言葉に出さなかったが、その考えはここまで撤退する最中もカールの脳内に確かに存在していた。

自分たちでなんとかセルベリアを救出できないものか、と。

しかし、それを実行するには余力が足りていない。弾薬も残り少ない。

この状況でギルランダイオへ引き返すのは自殺行為でしかない。

カールは迷った。

セルベリアの運命をガリア軍の手に委ねていいのか。それで、彼女は再び帝国に戻ってこられるのか。もしも、戻ってこなかったら自分はどうするのか。

どちらの可能性も存在する。しかし、戻ってこなかった場合。もしも彼女が、ガリア軍の手によって命を奪われるようなことになった場合。そうなった後では、取返しがつ

かないのだ。

分隊を預かる身としては、自分の身勝手で隊員を危険に晒すわけにはいかない。しかし、セルベリアの直援部隊たる自分たちが彼女を見捨てていいのか。この二律背反に決断を下せるほど、カールは指揮官としての経験を積んでいなかった。

カールが悩みの回廊に、足を踏み入れる直前。その視界の端で何かが動いた。

視線を向けると、十数メートル先の木の葉が微かに揺れている。風ではない。風なら森全体が騒めくはずだ。

何かいる。

カールの直観が告げた。

「みんな、武器を取れ。全周警戒だ。近くに何かいるぞ」

カールの言葉に促され、全員が自らの武器を構え、円陣を組むように周囲を警戒する。

「畜生、ガリア軍か……?」

オットーがZ M M P Bを腰だめに構えながら呟く。

張り詰めた空気が周囲を支配する。仲間の息遣いまで聞こえるような、異様な静寂だ。

汗でグローブの中がぐっしやりと濡れている。カールが銃把を握りなおした瞬間。

草木を掻き分けて、十数人の兵士たちがライフルをこちらに向けて姿を現した。いず

れも黒の戦闘服の上に、同じく黒のボディアーマーとヘルメットを身に着けている。その中の一人は、カールの眉間にライフルの狙いを定めていた。冷え切った真つ暗な銃口がカールを睨めつける。

数は相手の方が多い。下手に撃てば返り討ちは必至の状況だった。しかし、カールは相手の黒のヘルメットの眉間に狙いを定めた《フランシスカ》を下ろそうとはしない。状況を把握すべく、黒服の男たちの数を確認する。全部で十二人。しかし、カールは人数以前に相手の身に着ける装備の異質さに気付いた。

黒に金の装飾が施されているが、顔全体を覆うヘルメットにボディアーマー。基本的なレイアウトはカール達のものとは変わらない。

よく見ると、ライフルもカールのもと同型の ZM Karだ。その装備を見る限り、少なくともガリア軍ではない。色こそカールたちとは違うが、その装備は帝国軍のものだ。

友軍であるはずの相手に銃を向けられるという状況に戸惑い、カールを含む ブラウエ・ローゼン”の面々は沈黙に包まれた。

「我が隊の接近に早々に気づくとは、流石だな。カール・オザ・ヴァルド曹長」

ゆつたりとした口調が沈黙を破った。黒い兵士たちの背後から、帝国の士官用制服に身を包んだ四十代くらいの男が現れる。この森のど真ん中であつては、かつちりとскиこ

なしたその黒い制服は異質だ。わざとらしく生やした口ひげが特徴的で、深く被った制帽の下にある目は、まるで獲物を探す爬虫類のような怪しい眼光を湛えている。

「驚かせてすまなかったね」

口ひげの男が軽く右手を上げると、カールたちを取り囲んでいた兵士たちが銃の構えを解く。カールの眉間を狙っていたライフルも下げられた。自然とカールたちも銃を下ろす。

「私は中央方面軍・情報総局第3局課長のルーファス・J・シユタンケ中佐だ」

口ひげの男——シユタンケの所屬と階級を聞くと、カールは反射的に最敬礼の構えをとった。仲間たちもそれに倣う。

「失礼しました！ガリア中部侵攻部隊司令部付き即応遊撃分隊のカール・オザ・ヴァルド曹長であります！」

カールの反応を見ると、シユタンケはニンマリと満足気に微笑んだ。しかし、その爬虫類のような眼差しは変わっていない。

「ガリア侵攻の英雄に直に会えて光栄だよ、曹長」

シユタンケの言葉にカールは眉を顰める。

「英雄……、でありますか？」

カールにはシユタンケの言う意味が分からなかった。

この分隊の中に、英雄などと評される人間がいただろうか——？

怪訝な表情のカールを見ると、シュタンケの表情が満足気な笑みから不敵な笑みへとニュアンスが変わっていく。

「君にはこう言つた方が分かりやすかつたかな？」

シュタンケの爬虫類のような眼がカールを鋭く捉えた。

『鉄人オザヴァルド』——と」

第1章 救援

第1話

「ヴァルキュリア人である私には——戦場にしか、居場所はないのかもしれぬな……」

透き通るような長い銀髪。紫外線など浴びたことがないのではないかとすら思える、白磁の肌。その純白の面で、異様なまでの存在感を放つ意思の強そうなルビーの如き真紅の瞳。

カールがこれまで出会ってきた女性の中でも、最も美しいと断言できる彼女は、やや俯き加減にそう呟いた。声音には少なからず、寂しさを感じさせる。

それは、カールが初めて目にした、彼女の弱さともとれる一面だった。

「大佐……」

彼女に何か言葉をかけてやりたかったが、こんなとき女性にどんな言葉をかけたらいのか判断ができるほど、カールは女性経験を積んではいなかった。

彼女の階級を、ぼそりと呟くことしかできない己の不甲斐なさを嘯みしめる。

彼女から受けた恩に報いるには、どうしたらいいのか。そのときのカールはただ、彼

女の後を追いかけるしかできなかつた。

征曆1935年10月8日

ガリア公国・東ヨーロッパ帝国連合国境　ギルランダイオ要塞近郊　東ヨーロッパ帝国連合・仮設陣地

ギルランダイオ要塞にほど近い帝国側の森の中には、ルーファス・J・シユタンケ中佐率いる中央方面軍・第3親衛猟兵小隊が設営した陣地が構築されていた。

陣地といつても、司令本部と兵士の宿舎も兼ねた休息用のテントが設置された土地の周りを、土嚢で囲っただけの簡素なものだ。土嚢には機関銃の類も設置されていない。

戦時中とはいえ、中立国であるガリアが帝国側に攻め込んでくることは、戦力的にももあり得ない。それが、陣地の守りが最低限にとどめられている理由だった。

その宿舎用テントの簡易ベッドで、カールは微睡から目覚めた。

ギルランダイオを脱出してから、夜通し森の中を逃げまわったカールたちに、作戦開始に備え、仮眠をとっておくようシユタンケは命じた。

カールは無意識にベッドの傍らに目をやる。そこには、初陣以来共に戦ってきた戦友——オットーが隣のベッドでデカいいびきをかいている姿があつた。

落胆というほどではないが、カールの口からは溜息が漏れた。

初陣を経験したあの日以来、カールは前線や野営地のテントで目覚めると、周りを気にしてしまう癖がついていた。もしかしたら、また傍らで彼女が——セルベリア・ブレス大佐が、自分が目覚めるのを待っていてくれるのではないかと。

あの時の記憶を、カールは今でもはつきりと覚えている。ぷつくりとした柔らかそうな桜色の唇。心配そうな視線を投げかける真紅の瞳。心地よい重みと、最上級の柔らかさと弾力でもって、自分の腕に乗っかっていた乳房。そして、その直後、頬に走った理不尽な鋭い痛み。

その全てが、カールにとって、彼女を間近に感じた最初の記憶であり、彼女の身体に触れた唯一の記憶だった。

だが、いまやその彼女は、自分の手の到底届かないところに捕らわれている。にも、関わらず、いつもの癖が出てしまった。

「寝ぼけている場合じゃない……」

カールは十数時間前の出来事を思い返す。

10月7日

ギルランダイオ要塞近郊

『鉄人』などと渾名されるほど、自分は強い人間ではありません。自分は、兵士として当然の行為をしたにすぎません」

シユタンケの発した『鉄人オザヴァルド』という渾名を、カールは反射的に否定した。「あのとき自分は、支援兵として毒ガスに侵された友軍を治療したにすぎず、戦闘で勝利できたのは、ひとえに、セルベリア・ブレス大佐の指揮のおかげに他ならないと考えます」

カールの言葉にシユタンケはフン、と鼻をならした。

「随分と謙虚なことだ」

シユタンケの言葉を聞き、自分の発言を冷静に顧みて、カールはしまった、と思った。「も、申し訳ありません！もちろん、皇帝陛下から頂戴した勲章と、国民から英雄として湛えられることは身に余る栄誉であり、その……ええと——」

慌てて自分の発言を訂正するが、言葉が上手く続かない。カールの背後に控える「ブラウエ・ローゼン」の面々が、呆れかえる気配をカールは背中越しに感じた。戦場で戦うようになってから、こんなことばかり得意になっているが、今はそんな気配を感じたくはなかった。

「安心したまえ、曹長。皇帝陛下は寛大な御方だ。その程度の発言を咎められるほど、狭量ではないよ」

シユタンケの表情が先ほどより和らぐが、爬虫類のような目からは相変わらず感情がよめない。カールは本能的に、この男にあまり好意をいだくことができなかつた。

「さて、早速だが本題に入ろう。貴官らが『ブラウエ・ローゼン』であることはわかった。だが、その直属の上官であるセルベリア・プレス大佐は、今やガリア軍の捕虜となっている。間違いないかね？」

シユタンケは『ブラウエ・ローゼン』の面々を一通り流し見て、再びカールに視線を戻す。

「はつ、その通りであります。ですが、何故そこまでの情報を……？」

「先ほど言ったように、私はこれでも諜報部に属する人間でね。ガリア軍の動向を探るくらいなら造作もない。まして、君たちは我が軍の兵士だ。ならば、答えは自ずと導かれるだろう？」

シユタンケは愉悦たつぷりにそう告げた。シユタンケが所属する情報総局とは、中央方面軍が有する独自の諜報組織だ。敵国である連邦やガリア軍はもちろん、帝国の各方面軍にも諜報員を紛れ込ませているのだろう。そして、それはガリア侵攻部隊も例外では無かったということだ。

「おっと、横道に逸れてしまったな。話を戻そう」

シユタンケは軽く肩を竦めてみせると、話題の軌道修正を図った。

「貴官等が所属する司令部付き即応遊撃分隊は、『司令部付き』という肩書きを与えられてはいるが、その任務はプレス大佐の護衛ないし前線での直援と聞いている。に

も、関わらず、何故大佐がガリア軍の手に落ちる結果となってしまったのかね？」
シユタンケの口調に、分隊長であるカールの責任を追及するようなニュアンスは感じられない。

「それは——」

カールは数時間前、ギルランダイ才要塞を脱出した時のことを思い返す。そのときのことを頭に浮かべるだけで、自分の不甲斐なさが込み上げてきた。

「中佐が仰った通り、我々は大佐をお傍で守るのが任務です。要塞防衛戦でもそれは変わりませんでした」

シユタンケは、無言でカールの次の言葉を待つ。カールは要塞防衛戦の記憶を整理しつつ、ゆっくりと口を開いた。

「ですが、ガリア軍が要塞の正面ゲートを突破し、内部になだれ込んだ際、戦闘は敵と味方の部隊が入り乱れる混戦となりました。その後、徐々に我が軍が追い詰められ、旗色が悪くなると、大佐は要塞脱出の準備を始め、その指揮を我が隊に命令したのです」
「大佐の直援を優先しようとは考えなかったのかね？」

「無論それは考慮しました。しかし、防衛戦の指揮官である大佐が、その場を離れては防衛部隊に混乱が生じ、戦線は即座に瓦解していたはずです……。そのくらい、我が軍は追い詰められていました。要塞内部の複雑な構造が、指揮系統の分断を招く結果と

なっていたのです」

「なるほど、それで貴官等は要塞内の部隊を集め脱出の準備を急いだ——か」

「はい。我々は出来る限り多くの部隊をガリア軍の包囲から救出し、要塞脱出の支援をしました。しかし、その最中、大佐の部隊が包囲されつつあるという報告を受けたのです。本来の任務である大佐の直援にあたるため、大佐の元に向かいました。手遅れでした。その時点でガリア軍は要塞の約八割を掌握。勝敗は決していました。我々は、なんとか大佐の元に辿り着こうとしましたが、ガリア軍の猛攻を受け、後退を余儀なくされ、そのまま——」

命からがら要塞を脱出した——最後の一言を、カールは言葉にすることができなかつた。

「我々を最後に阻んだ部隊は、戦車を有していました。その戦車に刻まれていた部隊章から推測するに、あれは第7小隊だと思われます……」

カールの言葉を聞き、シユタンケの眉が微かに動く。

「第7小隊……ガリア義勇軍の最精鋭部隊か」

ガリア義勇軍・第7小隊——各地で帝国軍を翻弄し、ガリア軍における反攻の狼煙となつた部隊だ。帝国軍兵士の間では『あの部隊を相手にすると、どんなに有利な状況でも負ける』と噂されている。

「今にして思えば、大佐は我々を逃がすために脱出の指揮を任せただと思います……」

「なるほどな……」

カールにはシュタンケの返事から、あまりに感情が欠如しているように感じられた。

「貴官等が置かれた状況は理解した。そこで、貴官等に——いや貴隊に聞きたい」

シュタンケは、今度はカールを含めた、*「ブラウエ・ローゼン」* 全体を流し見た。

「貴隊はこれより先、セルベリア・プレス大佐の直援という任務を、全うする覚悟はあるか？」

捕虜となっているセルベリアの直援を全うする。シュタンケの言う意味が分からず、カールは戸惑った。隊員たちも互いに顔を見合わせている。

「中佐が仰る意味が理解できません。捕虜となった大佐の直援とは、どのような意味でしょうか？」

「つまり、セルベリア・プレス大佐を、ガリア軍から救出する気はあるか、と聞いています」

「た、大佐をガリア軍から……？」

カールは我知らず、シュタンケの言葉をおうむ返しにしていた。

「単刀直入に言おう。私は貴隊に、セルベリア・プレス大佐の奪還作戦に参加してもら

いたい」

「奪還と言つても今の我々には、戦力が……」

セルベリアを要塞から救出する。その考えは要塞脱出した直後からカールの脳内に存在した。しかし、どう考えても無茶だ。あの状況でそれを断行するのは、蛮勇や、無謀というレベルを超えている。

「もちろん、私が連れてきた小隊も出来る限り、協力する。貴官等の装備は消耗しているようだから、補給も提供しよう。ただし、一つだけ条件がある」

「条件とは……？」

「要塞へ直接侵入するのは、貴隊のみだ。我々ができるのは、補給や要塞侵入時の陽動など、バックアップのみになる」

「それは、帝国軍中佐としての命令でしょうか？」

カールはシュタンケが、命令という意味の単語を、未だ発していないことが気になった。

「これはあくまで要請だ。決定権は君にある。カール・オザ・ヴァルド曹長」

シュタンケの突然の申し出に、カールは俯いた。カールだけで決められるほど、事態は単純ではない。

「いくつか、質問をよろしいでしょうか？」

カールの後ろに控えていたオットーが、唐突に口を開いた。

「許可しよう」

シユタンケはオットーに視線を移した。

「中佐は何故、ブレス大佐の奪還にこだわるのでしょうか？」

オットーは一步進み出て、カールの横に並ぶと質問を口にした。

「貴官等は、セルベリア・ブレス大佐がヴァルクュリアであることは知っているな？」

ヴァルクュリア——近年、帝国で研究が進められている、超人的な運動能力と治癒能力を持った特殊な人間のことだ。その力は、伝説に登場するヴァルクュリア人に酷似しているという。

「はい。少なくとも大佐が指揮する中部ガリア侵攻部隊では、知らぬ者はいない筈です」

オットーはよどみなく答えた。

「ブラウエ・ローゼン」の面々は、これまでの戦闘で、セルベリアのヴァルクュリアとしての力を目の当たりにしてきた。その力は圧倒的で、彼女一人の戦力で一個戦車中隊に匹敵するとも言われている。

「貴官等は、ギルランダイオで大佐が何故その力を使わなかったのか、不思議に思わなかったかね？」

「そ、それは……」

オットーが言いよどむ。

セルベリアは、ヴァルキュリアとしての自分に自負を持っていたが、同時にそれを多用することを恐れた。その力を使うことは、セルベリア自身の『人間』としての価値を否定するに等しいことであると、理解していたからだ。

だが、この事実を知っているのは、セルベリアに近いカールを初めとした、*「ブラウエ・ローゼン」*のみだ。それをシュタンケに話していいのか、オットーは迷ったのであろう。

「理由は単純だ」

オットーの答えを待たず、シュタンケが口を開く。

「大佐はマクシミリアン殿下から命令を受けていたのだよ」

「命令……でありますか？」

「そうだ。ガリア軍を要塞に引きつけ、ヴァルキュリアの『最後の炎』にて、その全てを焼き尽くせ、と」

「『最後の炎』……？」

カールは、耳慣れぬ単語を無意識に口にした。

第2話

征曆1935年10月7日

ガリア公国・東ヨーロッパ帝国連合国境　ギルランダイオ要塞近郊

「最後の炎……?」

カールはシユタンケが発した耳慣れない単語を、我知らずおうむ返しにした。その意味は分からないが、カールにはとてつもなく不穏な何かのように感じられる。そんなカールを気にも留めず、シユタンケは言葉を続けた。

「ヴァルキュリアに関する研究は未だ途上にあり、その能力に関しては解明されていない部分が多くある。しかし、ヨーロッパ各地に点在するヴァルキュリア関連の遺跡や文献の記述を照らし合わせると、そのおおよその力は紐解くことができる」

シユタンケの爬虫類の如き眼に、初めて怪しい眼光が宿るのをカールは見逃さなかった。

「蒼い炎を纏い、槍と盾を両の手に、超人的な戦闘能力を發揮する。これが、諸君等が目にしたセルベリア・プレス大佐の姿だろう。しかし、ヴァルキュリアにはもう一つ、秘められた『力』が存在するのだ」

シユタンケの言葉を聞き逃すまいと、*「ブラウエ・ローゼン」*の隊員たちが僅かに身を乗り出す。それは、カールも同じだった。

「その*「力」*は、ヴァルキュリアが己の最後を悟り、その命を燃やし尽くした時に発動される、と文献にはある」

『命を燃やし尽くした』というシユタンケの表現に、カールの背筋に冷たい物が走る
「それで、その*「力」*とは……?」

勿体ぶるようなシユタンケの言葉に耐え切れず、オットーが再び問いかける。シユタンケは鬱陶しげにオットーをジロリと睨むが、構わず続けた。

「ヴァルキュリアの命の炎が燃え尽きたとき、彼女たちは周りにいる全ての者を、道連れにする」

シユタンケの言葉にカールは息を飲んだ。周りの隊員たちも動揺を露わにする。

「つまりは、自爆だ」

カールの心拍数が一気に跳ね上がる。

「その威力は、通常のラグナイト爆弾の数千倍に達するという。まさに戦略兵器並みの威力と言われている」

「つまり、マクシミリアン殿下の命令とは、そいつをガリア軍主力部隊のど真ん中で発動させて、要塞もろとも吹き飛ばしちまおうってことですか?」

エーリヒが低く問いかける。平静を装ってはいるが、その表情はまだ引きつっている。

「その通りだ」

シュタンケはエーリヒの問いに深く頷いた。

「待ってください。それでガリア軍の主力を蹴散らしたとしても、もはや我々にはランドグリーズまで侵攻する戦力は残されていません。にも関わらず、その作戦を実行する意味とはなんでありますか？」

今度は対戦車兵のエルヴェイン。

「マクシミリアン殿下には、プレス大佐とは別の切り札が、もう一枚あったのだよ」
シュタンケが口角を吊り上げる。

「陸上戦艦《マーモット》、我が帝国陸海軍の粋を結集して開発された、侵攻用機動戦略兵器だ」

「陸上……戦艦……？」

聞いたこともない兵器の名を、ヘルベルトが戸惑うように呟く。だが、心境は皆同じだった。陸上戦艦などという馬鹿げた単語は、カールも聞いたことが無い。先ほどから、新たな情報ばかりシュタンケが口にするので、処理が追いつかない。

「要は超大型の戦車と考えてもらっていい」

「ブラウエ・ローゼン」の動揺を見て取ったシュタンケは捕捉を付け加えるが、その口調はどこか楽しげだ。

「超大型って、《ゲルビル》以上でありますか？」

カールは、マクシミリアンが座乗していた大型戦車、《ゲルビル》を引き合いに出してみた。340mm砲を主砲とする《ゲルビル》も、戦車としては破格の大きさだった。

「その通りだ。詳細なスペックは、情報総局の諜報網をもつてしても得られなかったが、《マーモット》を建造していたと見られるドッグのサイズからして、巡洋艦並みの大きさであることは確かだ」

「巡洋艦って……、そんなもんが陸上を走るのかよ……」

オットーが引きつった笑みを浮かべる。

「ともかく、これだけ強力な機動兵器があれば、首都ランドグリーズへの侵攻は容易いだろう。貴官等は、……いや、セルベリア・ブレス大佐はそのための布石だったというわけだ」

自分たちは元々、捨て駒だった。シュタンケが口にした、内容にカールは言葉を失う。

「これが、マクシミリアン殿下がブレス大佐を要塞に留め置いた理由だ。ここで正規軍の主力部隊を消し去ることができれば、ランドグリーズへの障壁となるのは首都防衛大隊のみ。だが、我が軍の参謀本部は、このような形でブレス大佐を失うことを良しと

しなかった。当然と言えば当然だが、彼女は我が国にとって貴重なヴァルクユリア人だ。その上、軍事的才覚もずば抜けている。そんな彼女をみすみす失うのは、我が軍の損失にかなりえない」

セルベリアを軍人として、そしてヴァルクユリアとしてしか見ていないシュタンケの言い分に、カールは異を唱えたかったが、その言葉をなんとか飲み込む。軍隊である以上、軍人を評価する基準が軍事的利用価値に傾倒するのは当然であると、カールも理解はしているのだ。

「マクシミリアン殿下の首輪が解かれた今、彼女の身柄は中央方面軍で預かろうという訳だ」

いちいちカールの痛に障る言い方をするシュタンケだが、カールは必至で己の感情を抑え込んだ。セルベリアを救う糸口がやっと見えてきたかもしれないのに、それを自分一人の感情に任せた発言で断ち切ってしまう訳にはいかない。

「では、もう一つ伺ってもよろしいでしょうか」

歯ぎしりしたくなる思いを必死で堪えるカールを尻目に、オットーが再びシュタンケに問う。

「なんだね？」

「先ほど中佐は、要塞内部への侵入は我が隊のみになると仰られました。プレス大佐

の救出が参謀本部の意向であるなら、もつと大規模な攻勢をかけることも可能なのではないでしょうか」

オットーの問いは至極もつとものだ。参謀本部が命令を下し、帝国軍が要塞奪還のための増援を送り込んでくれさえすれば、作戦が成功する確率はより高くなるはずだ。それなのに、わざわざ一分隊にすぎない自分たちをシュタンケが頼るのは何故なのか。

「それについては幾つか事情があつてね。まず一つは、要塞内部は複雑に入り組んでおり、構造を把握していない大部隊を送り込むよりも、内部を熟知した少数の部隊を送り込んだ方が効率的であること。そして、もう一つは、本国では既にガリアとの停戦の準備が進められている為だ。これ以上、ガリアへ兵力を差し向けるのは得策ではない。加えて、このタイミングで大規模な攻勢をかけたとしたら、後の停戦協定の場で我が国の不利に働く恐れがある」

停戦——覚悟はしていたが、いざ言葉で聞かされると、釈然としなかった。この状況での停戦は、帝国の敗北に等しい。この数か月間、セルベリアと戦場を駆けたのは無駄だったのか。そして、死んでいった仲間たちは、無駄死にだったのかという思いが、カール胸に重く押し掛かる。

「安心したまえ、曹長。停戦といつても無条件で引き下がる訳ではない」
カールの内心を斟酌したシュタンケが、カールの肩に手を乗せる。

「ガリアには、我が国へのラグナイトの安定した供給を条件に停戦協定を結ぶ運びになつてゐる。そのため『仕掛け』も準備した」

「仕掛け——でありますか？」

「帝国に抗する戦力が残つてゐては、彼等は協定にサインしないだろう。そのため、やはり正規軍本隊にはギルランダイオと共に消えて貰わねばならない」

「しかし、参謀本部は大佐の救出を欲していると——」

カールの抗議をシュタンケは被せるように遮つた。

「その通りだ。あらゆる事態を想定して、我が情報総局はギルランダイオ要塞に、本国で開発中だった新型爆薬を予め仕掛けておいた。貴官等には、プレス大佐の救出と、この爆薬の起爆をしてもらいたい」

ヴァルクキュリアの『最後の炎』に、陸上戦艦《マーモット》の存在。さらには、ガリアへの停戦の申し入れと、新型爆弾の開発。カールは、その全ての情報を整理するのに、若干の時間を有した。